

自然誌 だより 夏

Natural history

三重自然誌の会情報誌 69号

2006年 9月

鈴島にシカ上陸

鈴島は紀伊長島の沖合にあり、三浦の高塚公園の岬からは約1kmの距離です。南北800m、東西600m、面積約28haで、北側に標高74m、南側に標高101mの山頂があり、ヒョウタン型の島です。島の西側に2つの海跡湖があり、そのうちのひとつは淡水を湛えており、メダカや水辺にはハマナツメの群落も見られます。昭和20年代のはじめの頃に、この池を利用したボラ養殖やイグサ栽培が行われた記録がありますが、現在は県指定天然記念物「鈴島暖地性植物群落」および国設鳥獣保護区として保護され、渡島も制限されています。ところが、この禁を破って島に上陸した輩がいます。ニホンジカです。最初のシカ上陸情報は、鳥類調査で同島を訪れた武田恵世氏によってもたらされました。2004年6月18日に撮影したシカ死体と足跡、食痕等の写真が届けられ(写真1)、それを受けて同年7月9日に現地調査を行いました。シカによると思われる採食痕が海跡湖周辺に生育するシバナを中心に認められましたが、新たな足跡等は確認できなかったことから、上陸は1個体で、死亡したものと判断しました。ところが、鳥獣保護区管理員の堀内弘氏がその後の調査で新しい足跡を発見し、本年6月21日に渡島した際にはついに樹皮剥ぎが発生していました(写真2)。鈴島にはこれまで草食獣は生息していませんでしたので、今後の植生変化が気になるところです。シカはおそらく泳いで渡ったのでしょうか、群生活をしていますので複数個体が上陸したと考える方が自然です。個体の寿命は15~20年とされていますが、繁殖が行われればさらに悲劇的な結末が予測されます。さて、どうしましょう。



写真1 鈴島で発見されたシカの死体. 2004年6月18日, 武田恵世・撮影



写真2 シカにより剥皮された樹幹. 2006年6月21日, 堀内弘・撮影

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

丸子池の植物

自然誌だよりの編集者の一人であり、丸子池管理者（自称）でもある清水善吉さんから、いつもの軽い調子で丸子池に生育する植物を誌上で紹介しませんかとの話しがありました。私もつい軽い調子で引き受けてしまい、しまったと思ったのですが、後悔先に立たずです。この池によく通ってみえるのは、山路武夫さんなので、詳細については山路さんに任すことにして、私の方は概略を記しておきたいと思います。



写真1 丸子池湿地（自転車奥の斜面）

場所は、松阪市藤之木町の里山の一角です。池の大きさは・・・と続けたいところですが、この池は、1999年頃埋め立てられ、今は雑草が生い茂る荒地となっています。埋め立てられる前は松阪市内でジュンサイがみられる唯一のため池だったそうです。この辺りのことは本誌46号（2000年11月）で中優さんが「ヒツジグサが消えた」に詳しく報告されています。実は、これから紹介する植物たちは、丸子池の中に生育していた植物ではなく、池の堤の下部に細々ながらも現在も生き残っている湿地植物たちのことです。中さんの後、47号誌上で清

水さんが「丸子池、その後」で報告しているように、池は埋め立てられたのですが、堤からしみ出した水によって作られた湿地が幸いにも残っていました。わずかな広さですが、ミズゴケが覆った場所や小さな水面、歩くと水がしみ出てくる過湿地、適度な湿り気をもった傾斜地といった変化に富んだ立地がみられます。

私も何回かこの池に行きましたが、季節により意外といろんな植物が出てきます。春になるとハルリンドウが咲き、5月頃からマアザミ（キク科）や釣り鐘状の花をつけるカイナンサラサドウダン（ツツジ科）、クロミノニシゴリ（ハイノキ科）が咲き始め、秋にはキキョウ（キキョウ科）、サワシロギク（キク科）、オミナエシ（オミナエシ科）が満開となります。以前はラン科のサギソウも多かったそうですが、これは乱獲により絶滅しました。他にミカワシンジュガヤ、ケシンジュガヤなど県内でもそれほど多くはないカヤツリグサ科の湿地植物もみられます。モウセンゴケも埋め立て当時は確認できたのですが、徐々に乾燥化しているのでしょうか、残念ながら消滅してしまいました。でも狭いところにもかかわらず、丸子池湿地（とでもいいましょうか）には、松阪市の里山に発達する湿地植物がコンパクトにおさまっており、レッドデータブックに登載されている植物もいくつかみられます。

湿地はそのままにしておいたら草が茂り、湿地植物はやがて消滅してしまいます。人が積極的に関わって草刈り等の管理が必要になってきます。丸子池湿地には自称管理者が1名



写真2 ハルリンドウ



写真3 カイナンサラサドウダン



写真4 キキョウ

いますが、自然誌の会で管理ができればと思ったりもしています。

以下に丸子池湿地で確認されたレッドデータブック掲載種の一覧を記しておきます。カイナンサラサドウダン(ツツジ科)：準絶滅危惧(三) クロミノニシゴリ(ハイノキ科)：絶滅危惧ⅠB類(三)，絶滅危惧ⅠA類(近) ハルリンドウ(リンドウ科)：準絶滅危惧(三) キキョウ(キキョウ科)：準絶滅危惧(三)，絶滅危惧Ⅱ類(近，国) サワシログク(キク科)：準絶滅危惧(三)，絶滅危惧Ⅱ類(近) ミカワシンジュガヤ(カヤツリグサ科)：絶滅危惧Ⅱ類(三)，絶滅危惧ⅠB類(近，国) ケシンジュガヤ(カヤツリグサ科)：絶滅危惧Ⅱ類(三)，絶滅危惧ⅠA類(近)

※(三)三重県版レッドデータブック，(近)近畿版レッドデータブック，(国)全国版レッドデータブック

〈山本和彦：尾鷲市小川西町8-40〉

田中川干潟におけるハマボウの記録

ハマボウ *Hibiscus hamabo* は、塩性湿地を代表する日本のハイビスカスである。津市河芸町地内、田中川河口の干潟でハマボウの発芽を多数確認したので報告する。



写真1 田中川河口とハマボウ

田中川干潟には、2006年現在2本のハマボウの成木が自生する。干潟の中央に育つ若い個体は5年前から開花がみられ、株元の幹周り0.55m，樹高2.2m，樹冠は東西に5.55m南北に3.90mの大きさである(2006年7月23日計測)。この若木の東側半分の樹冠下に約30株，その周辺部にも10株ほどの双葉が点在していた。

また、アイアシ *Phacelurus latifolius* が茂る堤防沿いにも本種の古木が生育し、

伊勢湾における北限のハマボウとされてきた。幹は3本に分かれ，それぞれの株元の幹周りは東0.51m南0.71m北0.78m，樹高4.2m，樹冠は東西に10.50m南北に9.40mの大きさであった(2006年7月29日計測)。なお，1991年に調査された岡与一氏の記録によると，分岐した株元の幹周りはそれぞれ東0.45m南0.47m北0.47mであった。この古木の樹冠下に約1000株の双葉を確認した。また，古木より滞筋に沿って南北におよそ100mの範囲においても，約30株の双葉が点在していた。アイアシの根元に近い堆積物の中でこれらの発芽を初めて確認したのは7月9日であり，7月23日現在，双葉から本葉が2枚ほどの大きさである。

6年にわたり本個体の観察を続けてきた篠木善重氏によると，発芽の確認は初めてとのことである。発芽したハマボウの苗の成長を今後も観察記録していきたい。

今回の調査に対し測量の際協力をいただいた大矢正雄，徳武孝規両氏，日頃より援助と協力をいただいている篠木善重氏，貴重な資料を作成された岡与一氏に，深く感謝します。

参考資料：田中川河口ハマボウ調査記録 平成3年7月25日，2004年7

月18日川づくり会議みえ 第11回勉強会 田中川観察会 配布資料。



写真2 ハマボウの実生

〈締次美穂：津市河芸町〉

耳穴島の植物

先日(5月21日), 紀北町紀伊長島区の沖合に浮かぶ耳穴島へ渡る機会がありました。この島はカンムリウミスズメ, アマツバメ, クロサギ, シマセンニュウなどの鳥類が生息および繁殖していることでよく知られています。これらの鳥類の生態や生息状況については, 熊野灘東部沿岸の鳥類(倉田篤, 1970)や耳穴島(樋口行雄, 1975)で詳しく報告されています。



写真1 耳穴島の植生

耳穴島は一つの島ではなく, 主要な三つの島と他にいくつかの小島や岩礁から成り立っています。今回はこれらの島嶼群の中の大きな二つの島に上陸し, 植生調査(1地点)と植物相の調査を実施しました。島の標高は, 最も高いところで約30m, 尾根筋から緩やかな傾斜を持って海に落ち込んでいる斜面と海蝕崖が発達し, 崖となっている急斜面とが見られます。植生は, 緩やかな斜面の上部から尾根筋にかけてよく発達し, 上部には樹高7 m前後のクロマツが散在し, その下には樹高4 m前後のウバメガシやモチノキ, モッコク, トベラ, ネズミモチ, ハマヒサカキ, クロマツなどが目立っています。地表はシダ植物のヒトツバやマルバマンネングサが多く, ウラシマソウやササユリ, コバノタツナミソウ, ツワブキなども比較的よく見られ, ちょうどコバノタツナミソウやウラシマソウが満開で, ササユリのつぼみも大きくふくらんでいました。

クロマツの高木は, 立枯れのものが島の随所で見られましたが, 同行していただいた堀内弘氏によると10年ほど前から松枯れが目立ちだしたそうです。島内には樹高4~5 mほどの健全な若いクロマツも生育していることから, これらが順調に育てばクロマツの消滅といった事態は免れそうです。ちなみに植生調査地点で見られたクロマツ枯死木は樹高12m(目測), 胸高直径27cmでしたが, 上部の枝の出方や下部の枝の痕跡から, 樹齢を推定して, 25年以上となりました。また樹高5m(目測)の健全なクロマツは, 胸高直径14cmで樹齢16年ほどでした。

島の下部は, 岩盤が露出し, まとまった植生はほとんど見られませんが, 岩の割れ目や平坦となった岩場の一部に, キノクニシオギク, アゼトウナ, ハマボッサ, ハマウド, クサスギカズラ, イソヤマテンツキ, イソアオスゲなどの海浜生の植物の中にススキやキケマン, テリハノイバラ等を見ることができます。

以下は, 耳穴島で見られた植物の観察記録です。なお, このリストは, 今回の調査で確認できたもので, この島に生育している植物を網羅したものではありません。リスト上の*印の種は採取標本があり, 他は視認によります。前述の樋口氏の報告書には, 30種類ほどの植物も記録されていますが, そのなかにあるスダジイ, ハゼノキ, トキワガキ, ヤブコウジ, ハマボウフウ, ハマエノコロは今回見つけることができませんでした。



写真2 マルバシャリンバイ



写真3 ハマボッサ



写真4 コバノタツナミソウ

●シダ植物

オシダ科：オニヤブソテツ．ウラボシ科：ヒトツバ

●裸子植物

マツ科：クロマツ＊

●被子植物

離弁花類／ブナ科：ウバメガシ．ナデシコ科：ハマナデシコ．アカザ科：シロザ．ツバキ科：ハマヒサカキ，モッコク．ケシ科：キケマン＊．ベンケイソウ科：マルバマンネングサ＊．トベラ科：トベラ．バラ科：マルバシャリンバイ＊，テリハノイバラ．モチノキ科：モチノキ．ブドウ科：ツタ．グミ科：マルバグミ＊．ウコギ科：カクレミノ．セリ科：ハマウド＊．**合弁花類**／サクラソウ科：ハマボッサ＊．モクセイ科：ネズミモチ＊．シソ科：コバノタツナミソウ＊．ナス科：イヌホオズキ＊．キク科：アゼトウナ，キノクニシオギク＊，ツワブキ．**単子葉類**／ユリ科：クサスギカズラ＊，ササユリ．ヒガンバナ科：スイセン？．イネ科：ススキ．サトイモ科：ウラシマソウ．カヤツリグサ科：イソアオスゲ＊，イソヤマテンツキ＊．

〈山本和彦：尾鷲市小川西町8-40〉

オオルリが家に巣をしました

5月の中旬頃，家の横を流れる沢の近くで美しいオオルリを見ました．ピポー・ピリー・ジジーときれいな声で鳴きました．しばらく日がたってから，家の沢側ののきに，巣があるのを発見しました(写真1)．巣の下で小さな卵のカラも拾ったので(写真2)，ヒナが生まれたかも知れないと思いました．背中が青く腹が白いオスのオオルリに比べて，茶色っぽいメスのオオルリが，巣に出入りしていました．6月3日には，ヒナが3羽巣から顔を出しているのを見ました．

ところが，その日の夕方，いつも遊びに来るとなりのネコが，オオルリのオスをとってしまったのです．死んでしまったオスは，近くで見ると，ほんとうにきれいな青色をしていました．もうヒナたちはだめかもしれない．何とか育てる方法はないかと考えました．鳥のことを知っている人に聞いても，「育てるのはむづかしい」という答えでした．

もうあきらめかけた時，気がつくと，メスのオオルリが一生けんめいえさを運んでいました．見てみると，10分に1回くらいえさを持って巣にもどってきました．6月7日の朝，ついにヒナが巣立ちました．ヒナは3羽とも，きれいな青色をしたオスのオオルリでした．近くの竹の枝にとまり，ピポー・ピリー・ジジーとやや子どもっぽい声で鳴きました(写真3)．しばらくするとオオルリたちはどこかに旅立っていきました．ツバメのように来年も家に来てくれるといいのと思います．

〈村岡正貴・前田仁暉：大紀町大内山〉



写真1 家ののきにあるオオルリの巣



写真2 巣の下で拾った卵のカラ



写真3 竹の枝にとまるオオルリのオス

湿地植物ビオトープ整備

ちょっと格好良くタイトルをつけましたが、早い話が草刈りです。場所は、松阪市藤之木町の旧丸子池の堤の一部約250㎡です。この湿地の経緯については、本誌46、47号に掲載していますが、2001年から年に2～3回草刈りをしております。早春のハルリンドウから始まってキキョウやオミナエシなどが生育していますが、周囲の環境の変化（池の埋め立て）もあって遷移の進行は早いようです。手を加えなければ維持できないような環境を一時だけ保全するのは無意味かもしれませんが、楽しみ半分でやっています。近隣にお住まいで、一緒に作業をしていただける方がみえましたら、ぜひご連絡下さい。

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

外来植物駆除

志摩半島野生動物研究会では、志摩市和具大島において外来植物「ユッカラン」の駆除作業を行います。大島の豊かな自然環境を守るため、ぜひともご協力をお願いいたします。

実施日：8月26日（土）、9月3日（日）、9月23日（土）、9月27日（水）

集 合：志摩市志摩町和具漁港9時（解散は16時頃）

内 容：外来植物「ユッカラン」を手作業で掘り出し、島外へ搬出。

申 込：若林郁夫（090-8957-9288）

3県合同シンポ

三重・奈良・和歌山県の市民グループ連携による「紀伊半島の自然」をテーマにしたシンポジウムも2巡目に入っており、今年は和歌山県田辺市で開催されます。紀州田辺といえばナチュラリストの巨人・南方熊楠が活動した地としてしられ、記念館も整備されています。シンポは11月25-26日に予定されていますが、宿泊（懇親会）を希望される方は手配の都合上、9月末日までに事務局までハガキ（〒515-0834松阪市日丘町1386-17清水方）かファクシミリ（0598-58-0544）でお知らせ下さい。この機会に他県の方々と親睦を深め、情報を収集しましょう（事務局）。

お宅で標本が眠っていませんか。

本会では、「個人所蔵標本データベース化事業」に着手します。個人が所蔵している標本を整理することにより、公共財産として活用できるようにしていこうというものです。この事業の背景としては、今回のレッドデータブック編纂にあたって、標本のない情報は疑問が生じたときに検証の術がないという点で使いにくく、証拠標本を残していくことが自然誌解明には不可欠であることが再確認されたためです。せっかく集めた標本を「ゴミ」としてしまうのはあまりにも勿体ないことですし、また、公共物である自然を採取したわけですので、整理・公表の義務もあると思います。とはいっても、標本を公開できるスペースを確保するのは大変ですので、とりあえず各自が所有している標本の目録作成をすすめていきたいと思います。各分類群単位でチームをつくって作業を進めていきたいと思いますので、標本をお持ちの方は事務局までご連絡下さい。年内には一度集まって、方法や進め方等を話し合う予定です（事務局）。

事務局から

○2006年総会の報告

2006年6月25日(日)、松阪市中川コミュニティセンターで実施したシンポジウム終了後に行いました。総会参加者は14人。

2005年度事業報告

- 1 会報の発行
自然誌だより64～67号
- 2 会誌の発行
三重自然誌8/9/10合併号
- 3 調査
大杉・大台ヶ原一帯
- 4 講演会等
 - ・しぜん文化祭・2005に出展 テーマ「嫌われ者の生きものたち」
2005年7月17～18日(日、月/祝日) みえこどもの城(松阪市)
 - ・紀伊半島3県合同シンポジウム「紀伊半島の野生生物Ⅳーレッドリストと博物館」を共同開催。
2005年7月17日(日) みえこどもの城(松阪市)

2005年度会計報告

収 入		支 出	
会 費	330,000 (会員220人)	印 刷 費	279,200
繰 越 金	143,600	通 信 費	150,000
		事 務 費	38,900
計	476,600	計	468,100

繰越金＝476,600－468,100＝5,500円

2006年度事業

- 1 会報の発行
自然誌だより68～71号
- 2 会誌の発行
三重自然誌11号
- 3 調査
 - ①フィールド調査
銚子川流域調査(三重県委託)
大杉・大台ヶ原一帯
 - ②標本調査
個人所蔵標本データベース化事業
- 4 講演会
 - ・紀伊半島3県合同シンポジウム「紀伊半島の野生生物Ⅴ」を共催。
※和歌山県田辺市 11月25－26日(土、日)
- 5 ホームページ整備
ホームページ URL: <http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi/>
メールアドレス e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp

2006年度予算

収 入		支 出	
会 費	330,000 (会員220人)	印 刷 費	479,200
繰 越 金	5,500	通 信 費	150,000
委 託 費	546,000	事 務 費	12,300
		調 査 費	240,000
計	881,500	計	881,500

役 員

<会 長>

武田 明正

<運営委員（*印は新任）>

市川雄二 今村隆一 上田利彦* 小川隆之 北村治郎 佐野順子 塩崎哲哉 清水善吉 津村善博
富田靖男 中野環 中優* 森誠一 山野直也 山本和彦

<会計監査>

島地岩根 鈴木逸郎

退任：加田勝敏 市橋甫 石田昇三（ありがとうございました）

○シンポ「レッドデータブック・あらたな出発～市民グループの立場から」開催

6月25日（日）午後2時～5時まで開催され、約90人の参加がありました。基調講演のレッドリストカテゴリー評価方法については、個体数や生息地点数の基準が全分類群で同一なのは問題がある、減少率を算出することは過去のデータが不備な現状では困難等の意見がだされました。また、パネルディスカッションでは、まず調査が十分に行われていないことが各分野共通の問題点として提起されました。これに関して高校の生物部に期待できないかとの意見が出されましたが、会場からは部員不足等もあり困難との声もありました。また、自然誌分野の研究者が高齢化しており、個人所蔵標本の収蔵先の確保も今後早急に解決すべき問題としてあげられました。三重大学の学生を中心に若い人たちもたくさん来てくれましたが、生物多様性の解明や保全の醍醐味を十分に伝えられなかったことが、主催者としての大きな反省でした。



○生物多様性の調査や保全の活動情報をたよりに掲載していきたいと思いますので、情報提供をお願いします。次号は11月上旬発行予定です。

編 集 後 記

4月から職場が変わって、自分のペースが取り戻せつつあります。たよりの定期刊行、会誌の早期発行に努めます（善）。

自然誌だより69号

発 行 日 2006年9月1日

事 務 局 〒514-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発 行 者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年 会 費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp